ダチソウは，確かに記載説明文は本種であるが，図は茎の色や葉の形状などからみて，どうもオオアワダチソウのような気がする。勿論，このような一般向きの図説（だからこそ必要ともいえるが）では，専門的な詳細な記載などは無理としても，簡にして要を得た他種との区別点や特徴も，図と共に欲しいと思うのは，恐らく筆者だけではあるまい。

以上は筆者が現在，引続き行っている日本帰化植物誌の基礎資料のための検討結果の一部をまとめたものである。これら一連の調査，研究にあたって，ご多忙の中を長年にわたり種々御教示，御援助下さっている東京大学理学部の関係者各位，ならびにニューヨーク植物園の小山鐵夫博士，古い栽培記録などに関して御教示を得た津山　尚博士および富樫　誠氏に対し，衷心より厚く御礼申上げたい。

Solidago sempervirens L. and *S. juncea* Aiton, both natives of North America, were introduced to Japan for ornamental purpose. At present, these goldenrods are seldom escaped from cultivation in sunny waste sites around cities, and have begun to be semi-naturalized.　　　　（東京歯科大学）

□熊沢正夫：**植物器官学** (Kumazawa, Masao: Plant organography) 408 pp. 1979, VIII. 裳華房，¥4,200. 植物器官学は古く出発した学問である。近年は分子レベルの研究が最優先し，とかく押され勝ちであるが，基本形態に対する深い研究と智識とは忘却できないこともちろんである。小倉謙先生の植物形態学が出てすでに久しく，本書の出現を俟つことしきりであった吾々にとって，まことに喜ばしいことであった。本文は27の章に分かれ，器官学，器官から起し，花と花序，花に類する器官から種子，胚，子葉にうつり，一転して茎とその種々相を述べ，担根体から不定芽に入り，葉の起原，成長，形態の完成を経て葉序にうつり，その変形を述べて芽型並びに根に達し，不定根と突起体に終っている。花よりも茎と葉を，葉よりも子葉をといった見方が強い。また全体に系統を追うよりも，個々の実例の注視に重点がおかれているといえよう。植物の形態はまことに多岐である。それに注目して個々の事実を刻明に追って行く態度は，到るところにその実例をみることができる。50ページをこえる文献は，ひろく深く集められていてまことに有難い。近来にない一つの指導書としておすすめできる本である。　　　　（前川文夫）

□木村弥市・熱帯動植物友の会（編）：**原色図説熱帯果樹** (Color guide of tropical fruits) 162. pp. 1979, VI., 熱川バナナ・ワニ園研究室発行 非売品. 若くして逝った木村弥一君の三回忌に，その研究をおしんで遺稿をまとめたもの。主体は56種の熱帯果樹のカラー写真と対面の記事，並に性状で示した文章である。熱帯果樹としてはやや数が少ないが，主なものを網羅しているし，写真は大きくうつされているので，その特徴がよくわかる。富樫誠君が熱帯果樹の食用利用を附記している。　　（前川文夫）